

不快場面における幼児の対処方法の発達的变化  
対処の意図・理由に注目して

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
田中 佑光

本研究では、幼児の不快場面における対処方法の発達的变化について対処の意図・理由に注目して検討した。

調査は4,5,6歳児を対象とし、個別に仮想場面を用いて行った。まず、主人公が不快な経験をする場면을提示し、その時の気持ちと程度、自分であればどうするか、どうしてそうするのかについてたずねた。

この結果から、年齢によって対処方法には異なりが見られた。不快場面における幼児の対処方法はおおまかには非言語的な方法から言語的な対処方法へと変化していくことが示唆された。意図は、自己中心的視点から他者を考慮した視点を得ていくという発達的变化が示唆された。

また、対処方法は同じであっても年齢によってその意図・理由は異なる事が示された。他者との対立不安から自らの欲求を抑える回答も一部見られ、幼児の対処方法を見る際には行動だけではなく意図にも注目していくことが重要であることが示唆された。